

## 外来語アクセントにおける原語の発音の関与について：4モーラ以下の語を中心に

著者	田野村 忠温
雑誌名	日本語科学
巻	5
ページ	67-88
発行年	1999-04
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00002009">http://doi.org/10.15084/00002009</a>

# 外来語アクセントにおける原語の発音の関与について

## —— 4 モーラ以下の語を中心に ——

田 野 村 忠 温

(大阪外国語大学)

### キーワード

外来語, アクセント, 原語, 分節音, 挿入母音

### 要 旨

外来語のアクセントは原語のアクセントから独立しているとする見方が一般的であるが、多数の外来語を観察してみると原語アクセントの関与を示唆する状況証拠が外来語アクセントのさまざまな局面に見出される。また、外来語アクセントに影響を与える原語の発音の要素はアクセントにとどまらず、原語の分節音レベルの事実もまた外来語アクセントの重要な決定要因として働いている。

この小論では、『大辞林 CD-ROM 版』に見出し語として立てられた外来語のうち 4 モーラ以下の語を中心にそのアクセントを詳細に分析し、外来語アクセントに対する原語のアクセントや分節音の関与の諸相を明らかにする。

## 1. 外来語アクセントと原語の発音

外来語のアクセントの記述において原語の発音に言及することは避けられる傾向にある。説明原理の節約を求める言語記述の一般的な評価基準からすれば、外来語アクセントの記述が原語の発音から独立に行えるのであればそれに越したことはない。しかしながら、外来語アクセントを分析してみると、外来語アクセントと原語の発音のあいだにはさまざまな相関が見出される。

### 1.1. 原語アクセントの関与

外来語アクセントの研究においてしばしば問題とされるのは、原語のアクセントの関与の有無と程度である。

これについて、従来の研究は、概して原語アクセントの関与の認定に消極的であったと言ってよい<sup>1</sup>。ときに原語アクセントの関与が言われるとしても、それは仮定された外来語アクセントの法則の例外に説明を与えるのが目的で、外来語アクセント全般に対する原語アクセントの関与が想定されているわけではない。

確かに、原語のアクセントに一致しないアクセントを持つ外来語は珍しくない。外来語のアクセント核の位置には「<sub>1</sub>」を添えて、また、外来語アクセントと原語のアクセントが一致しない場合は原語のアクセント（第 1 強勢）に相当する位置に「<sub>1</sub>」を添えて示すことにすると、次のような例が挙げられる。

(3 モーラ語) カ<sub>1</sub>ヌ'ー, ギ<sub>1</sub>タ'ー, グ<sub>1</sub>ラ'ス, コ<sub>1</sub>ロ'ナ, ス<sub>1</sub>リ'ル, ス<sub>1</sub>ワ'ン,

セ1ダ'ン, ド1ラ'マ, ド1レ'ス, パ1ジャ'マ, バ1ニ'ラ, プ1ラ'ン, ホ1テ'ル  
 (4 モーラ語) コーヒ1ー, スクイ1'ズ, スクリ1'ュー, スト1'ロー, ト1'ロ'フィー,  
 パ1'タ1ーン, ハレ1'ル'ヤ, プロ1'ペ'ラ, レ1'フリ'ー, レ'プ1'リカ, ロ'ケ1'ット  
 (5 モーラ語) ア'スファ1'ルト, オ'ムニ1'バス, カ'トリ1'ック, カンガ1'ル'ー,  
 キ'ログ1'ラム, ジャ1'ンボリ'ー, ハ'ンモ1'ック, ピ'ンナ1'ップ, モ'トク1'ロス

しかし、日本語独自のアクセントを有する外来語の存在は、外来語アクセント全般にわたる原語アクセントの無関与を証明するものではない。実際、多数の外来語のアクセントは原語のアクセントに一致するのであり、とすれば、それらを完全に記述するアクセント法則を立てることができたとしても、それが原語アクセントに依存している可能性を排除することは不可能に近い。また、アクセントが原語のそれに一致する外来語の中には、日本語独自の外来語アクセントの法則に従っているとは考えがたい語もある。例えば、次に挙げる語のアクセントの多くは従来提案されてきた外来語アクセントの諸法則では正しく予測することができない<sup>2</sup>。

(4 モーラ語) エンジョ1'イ, カ1'ジュアル, コ1'テージ, サブラ1'イ, セ1'カンド,  
 ゼ1'スチュア, スクエ1'ア, ソ1'ネット, テ1'キスト, ビ1'リオド, メ1'リット  
 (5 モーラ語) コ1'ンテスト, サ1'イレント, スパ1'ニエル, セ1'レモニー, クレ1'ジット,  
 パ1'ッケージ, フェ1'スティバル, ペ1'ンダント, メモ1'リアル, レ1'ストラン

このような外来語は少なくない。いくつかの付随的な問題がからんでくるのでその数を確定することは困難であるが、『大辞林 CD-ROM 版』(後述)に見出し語として立てられた外来語のアクセントを通覧しての印象では、このように原語のアクセントが生かされていて従来の諸法則では説明できない外来語の比率は決して小さくない。

いずれにせよ、外来語アクセントの原語アクセントに対する依存の有無・程度は、想像や期待に基づいて決めるべきことではなく、原語アクセントの観点の導入によって外来語アクセントの記述の質をどれだけ向上させることができるかによって判断すべきことであろう。

## 1.2. 原語分節音の関与

外来語アクセントに対する原語の発音の関与が問われるとき、原語のアクセントだけが問題とされることが多いが、それでは十分ではない。と言うのは、外来語アクセントを分析してみると、そこには原語の分節音の関与が認められる——言い換えれば、外来語アクセントの一見不規則な分布が原語の分節音レベルの事実に基づいて説明できる——ことが明らかになるからである。

外来語アクセントに対する原語の分節音の関与については、これまでも若干の指摘はあった。例えば、秋永(1965)・遠藤(1969)・中井(1988)は、原語が子音連続で始まる外来語では第1モーラにアクセントが置かれにくいことを指摘している。窪菌(1996)にも、3モーラの外来語におけるアクセントと分節音の関わりについての指摘がある。以下においては、こうした観点からの分析をさらに押し進めることにより外来語アクセントの一見不規則な分布の中に一定の規則性を見出すことが可能になることを示したい。

ちなみに、外来語アクセントに対する原語の発音の関与を否定する根拠として、多くの日本語

話者は原語の発音に精通していないということが言われることがある。しかし、この観念的な議論の妥当性は疑わしい。まず、日本語に外来語の大部分を供給している英語は義務教育の段階から教育されており、日常的にもテレビその他で英語や英語もどきの発音を耳にする機会は少なくない。とすれば、日本語話者の英語の発音に対する感覚がそれほど乏しいものであるとは思えない。また、そもそも原語の発音に依存した外来語アクセントを習得するのに原語の発音の知識が必要なのかという疑問もある。アクセントの習得にはおそらくアクセントを聞き分ける耳さえあればよいのであって、それを外来語の場合に限って特定のアクセントを習得するには原語の知識が必要になると考えるのは不自然である。かりに多くの人々が原語の発音を知らないとしても、それを知っている人々による発話を（直接または間接的に）聞いて外来語を覚えるのであれば、原語アクセントに依存した外来語アクセントを習得できても何ら不思議なことではないと思われる。

## 2. 分析の資料と対象

この小論では外来語アクセントの資料として松村明編『大辞林 CD-ROM 版』（三省堂、1993年）を使用する。以後、これを単に『大辞林』ないし「資料」と呼ぶ。電子媒体であることからアクセントデータを機械的に処理できるという利点がある。

分析の対象は英語からの借用語に限定する。これは、外来語の出自によってアクセントのあり方が異なってくる可能性があるからである。例えば、英語からの借用語には尾高型アクセントの語が1つも無いのに対し、英語以外の言語からの借用語にはそれが見られる。この違いは英語の発音に固有の事情によるものとして説明できる可能性もあるが、ここではとりあえず量的に他を圧倒する英語からの借用語に限定して考察を行う。「ナイター」のような和製英語や、「ダイヤ(dia[gram], dia[mond])」「ケット([blan]ket)」「パトカー(pat[rol] car)」といった日本語独自の短縮語も対象外とする。

英語からの借用かどうかははっきりしない語もあるが、『大辞林』において英語以外の言語名が記されているものを分析対象から外すという方法による。例えば、「アメーバ」「クレヨン」「ピアノ」は原語がそれぞれドイツ語、フランス語、イタリア語と表示されているので除外されることになる。万全の方法ではないが、便宜上そのようにして判定する。

英語起源でも、「エルピー (LP)」「ビーシー(B.C.)」「ピーエッチ(pH)」「ビージーエム(BGM)」のようにアルファベットの文字名で読み下すタイプの複合語は除外する。秋永(1981)の記述にあるようにこの種の語は最後の要素の第1モーラにアクセントが置かれることが多く、特に分析を要しないからである。(ただし、「エスエル(SL)」「エフエム(FM)」のように後部要素が長母音や母音連続を含まない4モーラ語は平板型アクセントになる傾向が認められる。)

また、平板型アクセントの外来語、および、『大辞林』で複数のアクセントが併記されている外来語の平板型アクセントについては分布の条件が不明確なので考察の対象外とする<sup>3</sup>。

『大辞林』に見出し語として立てられた外来語のうちアクセントが記載されているものは約12,000語あるが（同辞典は固有名詞のアクセントは原則として記載していない）、英語以外の言語からの借用語（約2,000語）や平板型アクセントだけの外来語（約300語）などを除外すると、残る外来語の数

は約9,000語になる。ここではそのうち約3,200語を占める4モーラ以下の語を中心にアクセントを分析する。ただし、1モーラの外来語は資料中には存在せず、また、約3,200語のうち300語弱を占める2モーラ語においては平板型アクセントの「ゲラ(galley)」1語を除いてすべて第1モーラにアクセントが置かれており、考察の余地はない<sup>4</sup>。したがって、以下においては3モーラと4モーラの外来語について分析を行うことになる。

### 3. 3モーラの外来語のアクセント

英語に由来する3モーラの外来語において可能なアクセントは、平板型アクセントを除くと2種類しかない。すなわち、アクセントが第1モーラに置かれるか第2モーラに置かれるかのいずれかである。このこともあって、3モーラの外来語のアクセントの規則性は長い外来語の場合に比べて単純な形に整理することができる。

以下に、『大辞林』に記載された、アクセント核を有する3モーラの外来語1,246語の分析結果を述べる<sup>5</sup>。以後、外来語に含まれる母音のうち、原語に含まれる母音に対応するものを「本来母音」、原語の子音連続を解消するなどの目的で加えられたものを「挿入母音」と呼ぶことにする。

#### 3.1. 3モーラ語(1)——第1モーラが本来母音を含む語

3モーラの外来語のうち、まず第1モーラの母音が本来母音である語においては、アクセントは第1モーラに置かれる<sup>6</sup>。この場合、第2・第3モーラの内容や原語のアクセントには依存しない。まずアクセントの位置が原語のそれに一致する例を挙げれば次のごとくである。

アイス(ice), エース(ace), オイル(oil), カップ(cup), カラー(color), キャッチ(catch), サラダ(salad), チャンス(chance), ツアー(tour), テント(tent), ナ이프(knife), ブザー(buzzer), ボトル(bottle), ルビー(ruby), ワイン(wine)

次のような語は原語では第2音節に強勢があるが、それに左右されることなく第1モーラにアクセントが置かれる。

カヌー(canoe), ギター(guitar), ゲリラ(guerrilla), ゴリラ(gorilla), コロナ(corona), セダン(sedan), バザール(bazaar), パジャマ(pajamas), バニラ(vanilla), ホテル(hotel), ポリス(police), ミシン(machine)

以上のように第1モーラが本来母音を含んでいれば原語のアクセントを無視してまでも第1モーラにアクセントが置かれるという事実は、外来語のアクセントは語末から数えて3モーラ目に置かれるとする伝統的な見解が3モーラ語に関してよく適合すること、そして、本来母音を含むモーラが(3.2.以下で見る挿入母音を含むモーラと異なり)アクセントを担う力が強いことを示すものと考えられる。

第1モーラが本来母音を含む3モーラの外来語は『大辞林』に1,149語収録されているが、例外となり得るのはわずか14語である。そのうち、「ツデー(today)」「フレイ(hurray)」「マシン(machine)」「マリイン(marine)」の4語は、英語の強勢に対応する位置にアクセントが置かれる(資料外ながら地名のChicagoを「シカゴ」と発音するとすれば同様の例外となる)。14語中9語については、

『大辞林』において2通りのアクセントが併記されている。そのような語のアクセントを便宜上「...」のように表記する（原語の強勢配置が2通りあるときも同様に「...’...’...」とすることになると、「ア<sup>1</sup>ロ<sup>1</sup>イ(alloy)」「コ<sup>1</sup>コ<sup>1</sup>ア(cocoa)」「シ<sup>1</sup>ビ<sup>1</sup>ア(severe)」「タ<sup>1</sup>ブ<sup>1</sup>ー(taboo)」「チ<sup>1</sup>キ<sup>1</sup>ン(chicken)」「パ<sup>1</sup>タ<sup>1</sup>ン(pattern)」「ポ<sup>1</sup>ア<sup>1</sup>ズ(poise)」「リ<sup>1</sup>ピ<sup>1</sup>ド(lipid)」「レ<sup>1</sup>ビュ<sup>1</sup>ー(review)」がその9語で、第2モーラにアクセントを置く発音が例外となる。残る1語である「カ<sup>1</sup>グ<sup>1</sup>ー(kagu)」のアクセントは原則にも従わず、英語の強勢の位置にも一致しない。

なお、外来語の種別ごとの語数とその内訳（一般化に従う語の数と従わない語の数）をまとめた表を本文の後に掲げてあるので、以後必要に応じて参照されたい。

### 3.2. 3モーラ語(2) — 第1モーラが挿入母音を含み、第2・第3モーラが長母音または母音連続を含む語

第1モーラの母音が挿入母音である3モーラの外来語は2つの場合に分けて考えると都合がよい。

その1つは、第2・第3モーラが、原語の長母音または二重母音に対応する長母音ないし母音連続を含む場合である。これに該当する外来語は42語あり、その内訳は長母音を含む語が25語、母音連続を含む語が17語である。

このような外来語ではアクセントは第2モーラに置かれる。長母音を含む語には、

ウェイ(way), クル<sup>1</sup>ー(clue, crew), グレ<sup>1</sup>ー(gray), シチュ<sup>1</sup>ー(stew), スウェ<sup>1</sup>ー(sway), スキ<sup>1</sup>ー(ski), スタ<sup>1</sup>ー(star), スノ<sup>1</sup>ー(snow), スリ<sup>1</sup>ー(three), スロ<sup>1</sup>ー(slow, throw), トレー(tray), フリ<sup>1</sup>ー(free), ブル<sup>1</sup>ー(blue), フロ<sup>1</sup>ー(flow), プレ<sup>1</sup>ー(play)

など、母音連続を含む語には

ウェ<sup>1</sup>ア(wear), スカ<sup>1</sup>イ(sky), スコ<sup>1</sup>ア(score), スト<sup>1</sup>ア(store), スペ<sup>1</sup>ア(spare), トラ<sup>1</sup>イ(try), ドラ<sup>1</sup>イ(dry), フラ<sup>1</sup>イ(fly, fry), プラ<sup>1</sup>ウ(plow), フロ<sup>1</sup>ア(floor)

などがある。このうち、「ウェー」「ウエア」の第1モーラの母音は原語の半母音が母音化したものであるが、アクセントの観点からは、子音連続を解消するために加えられた挿入母音と同じものと見てよい。原語中の半母音と外来語の発音のいささか複雑な関係については末尾の補説を参照されたい。

第1モーラにアクセントを置こうとする3モーラの外来語の原則に反して第2モーラにアクセントが置かれるということから、長母音や母音連続を含む音節はそれ以外の音節よりもアクセントを強く引き付ける力を持っているものと言うことができる<sup>7</sup>。

例外となるのは、母音連続を含む「グ<sup>1</sup>レ<sup>1</sup>ア(glare)」「ト<sup>1</sup>ロ<sup>1</sup>イ(troy)」「ス<sup>1</sup>パ<sup>1</sup>イ(spy)」の3語である。「スパイ」については2通りのアクセントのうち一方が例外となる。これらの語においては挿入母音を含むモーラにアクセントが置かれる格好になっている。これは外来語全体からすると例外的と言うべき現象で、以下の各所で見ると、外来語アクセントに対して従来考えられてきた以上に深い関わりを持つ。以後、このように挿入母音を含むモーラにアクセントが置かれる現象ないしそれを規定する規則をやや不正確な名称ながら、挿入母音へのアクセント付与、略

して「A E V (accentuation on an epenthetic vowel)」と呼ぶことにする。

長母音を含む語に例外となるものはない。

### 3.3. 3モーラ語(3) — 第1モーラが挿入母音を含み、第2・第3モーラが長母音や母音連続を含まない語

第1モーラが挿入母音を含むもう1つのケースは、第2・第3モーラが長母音や母音連続を含まない語である。これに該当する外来語は資料中に55語含まれる。これらの語においては、アクセントを第1モーラに置くことを強制する本来母音もなければ、アクセントを第2モーラに引き付ける長母音や母音連続もない。このため、相対的に影響力の小さい他の要因の競合によってアクセントが決定されることになる。

まず結論から述べれば、目下のケースに該当する外来語のうち、原語が(A) (子音+) 半母音で始まる語および(B) /s/+無声音で始まる語では第2モーラ、(C) 原語がそれら以外の子音連続で始まる語では第1モーラにアクセントが置かれる、ということになる。(C) の場合にはA E Vが適用し、原語の強勢に対応しない位置にアクセントが置かれる。

具体的な語を用いて例示すれば次の通りである。

(A) 原語が(子音+) 半母音で始まる語 — 第2モーラにアクセント

イエ1ス(yes), ツイ1ン(twin)

(B) 原語が/s/+無声音という子音連続で始まる語 — 第2モーラにアクセント

スキ1ル(skill), スキ1ン(skin), スパ1ナ(spanner), スピ1ン(spin), スペ1ル(spell)

(C) 原語がそれら以外の子音連続で始まる語 — 第1モーラにアクセント (A E V適用)

/p-/ プ1ラ'グ(plug), プ1ラ'ス(plus), プ1ラ'ム(plum), プ1ラ'ン(plan)

/b-/ ブ1ラ'ス(brass), ブ1ラ'フ(bluff)

/t-/ ト1ラ'ス(truss), ト1リ'ム(trim)

/d-/ ド1ラ'マ(drama), ド1ラ'ム(drum), ド1リ'ル(drill), ド1レ'ス(dress)

/k-/ ク1ラ'ス(class), ク1ラ'ブ(club), ク1ラ'ン(clan), ク1ロ'ン(clone)

/g-/ グ1ラ'ス(glass, grass), グ1ラ'フ(graph), グ1ラ'ブ(glove), グ1ラ'ム(gram)

/f-/ フ1リ'ル(frill)

/θ-/ ス1リ'ル(thrill)

/s-/ ス1ラ'グ(slag), ス1ラ'ブ(slab), ス1ラ'ム(slum), ス1リ'ム(slim)

以下に、(A)～(C) のそれぞれについて述べる。

3.3.1. (A) は原語に含まれる半母音に関係したケースで、半母音に関わる挿入母音を含むモーラにはアクセントが置かれにくいという制約により(詳しくは補説を参照)、アクセントが第2モーラに置かれるものである。ただ、これに該当する語は資料中にはわずかしがなく、またそれにもかかわらず例外もあるので、上述の一般化は正当化を要する。

(A) のうちまず原語が半母音で始まる外来語は資料中には上掲の「イエス」1語しかないが——

「ワイド(wide)」「ヨット(yacht)」のように第1モーラの母音が本来母音である語は目下のケースには該当しない——、これらと同様に will, win, well のような語を3モーラの外来語として使うとすればやはり「ウイ<sub>1</sub>ル」「ウイ<sub>1</sub>ン」「ウエ<sub>1</sub>ル」のようになり、yell を(「エ<sub>1</sub>ール」ではなく)「イエ<sub>1</sub>ル」として外来語化すれば「イエ<sub>1</sub>ル」になるものと思われる。

また、(A)のうち原語が子音+半母音で始まる3モーラの外来語は資料には上掲の「ツイン」と「クイ<sub>1</sub>ズ(quiz)」「スワ<sub>1</sub>ン(swan)」の計3語しかないが、後2者はアクセントが第1モーラに置かれ、例外のほうが多い形になっている。しかし、もしswell, swim, quill, queen のような語を3モーラの外来語として使うとすれば「スウェ<sub>1</sub>ル」「スイ<sub>1</sub>ム」「クイ<sub>1</sub>ル」「クイ<sub>1</sub>ン」になるように筆者には感じられることや、いずれにせよ「クイズ」「スワン」のように原語の子音+半母音という子音連続の最初の子音を含むモーラにアクセントが置かれることは例外的であることや、原語が半母音で始まる「イエス」などのケースと統一的に扱えることから考えて、上述のように一般化するのが1つの妥当な選択ではないかと思われる。

なお、「ウエ<sub>1</sub>ー(way)」「スウェ<sub>1</sub>ー(sway)」などの語においても第2モーラにアクセントが置かれるが、これらの語は長母音を含むという理由によってもアクセントの位置が予測される場所である(3.2.参照)。

3.3.2. (B) は原語が無声子音の連続で始まるケースで、第2モーラにアクセントが置かれる。ちなみに、原語が/s/+有声音という子音連続で始まる語は(C)に該当し、「スラ<sub>1</sub>ム(slum)」「スリ<sub>1</sub>ム(slim)」のように第1モーラにアクセントが置かれる。

(B)に属する語は3.3.に挙げた5語を含む8語で、例外となる語はない。原語がこれらと同様に/s/+無声音で始まる「シチュ<sub>1</sub>ー(stew)」「スカ<sub>1</sub>イ(sky)」「スキ<sub>1</sub>ー(ski)」「スタ<sub>1</sub>ー(star)」「ストア(store)」「スペ<sub>1</sub>ア(spare)」などの語においても第2モーラにアクセントが置かれるが、これらについては長母音や母音連続を含むという理由によってもアクセントの位置が予測される(3.2.参照)。

(B)のアクセントは、無声子音にはさまれた母音が無声化しやすく、そして、無声化した母音はアクセントを担いにくいということによるものと考えられるが、だからと言って、母音の無声化によってアクセントがもとの位置からずれた——つまり、古くは「\*ス<sub>1</sub>キル」と発音されていたものが「スキ<sub>1</sub>ル」というアクセントに変わった——と考える<sup>8</sup>べき根拠はない。いずれにせよ、母音の無声化を出発点としてアクセントの事実を説明しようとする循環論に陥ることを避けたい。例えば、「シチュ<sub>1</sub>ー」では母音が無声化するからアクセントが第2モーラに置かれ、「シ<sub>1</sub>ティー(city)」では母音が無声化しないからアクセントが第1モーラに置かれるなどと言っても仕方がない。アクセントの違いが母音の無声化の有無を生じている可能性が大きいためである。この小論の立場は、母音の無声化を説明の原理とするのではなく、原語の分節音レベルの事実を出発点として、当該の外来語のアクセントを予測しようとするものである。つまり、「シチュ<sub>1</sub>ー」では原語の段階で/s/の直後に母音がないのに対し、「シティ<sub>1</sub>ー」ではそれがある——すなわち、第1モーラの母音が前者では挿入母音、後者では本来母音である——という事実に着目することで、



循環論に陥ることなくアクセントを記述することが可能になるのである。

3.3.3. (C) は、AEVが適用してアクセントが第1モーラに置かれるケースである。

AEVは、原語では母音のない位置にアクセントを置くわけであるから、その意味で不自然な音韻操作であり、何らかの積極的な動機付けがなければ回避される性質のものだと考えられる。つまり、AEVが適用される場合には、アクセントをその位置に置こうとする何らかの強い力が働いており、それがAEVの適用を回避しようとする力を上回るものと考えられる。目下のケースについて言えば、その“何らかの強い力”とは、3モーラの外来語のアクセントを第1モーラに置こうとする、従来よく知られた、そして3.1.でも確認した傾向にほかならない。

このことは、原語の全体または一部を共有する外来語の対（ないし組）の中に、AEVの適用に関して対照的な振舞いを見せるものがあるという事実にも反映されている。例えば、「グ<sup>1</sup>ラ<sup>1</sup>ブ(glove)」対「グ<sup>1</sup>ロ<sup>1</sup>ーブ」, 「グ<sup>1</sup>リ<sup>1</sup>’ス(grease)」対「グ<sup>1</sup>リ<sup>1</sup>ース」, 「ブ<sup>1</sup>ラ<sup>1</sup>’シ(brush)」対「ブ<sup>1</sup>ラ<sup>1</sup>ッシュ」, 「ド<sup>1</sup>レ<sup>1</sup>ス(dress)」対「ド<sup>1</sup>レ<sup>1</sup>ッサー(dresser)」, 「ド<sup>1</sup>レ<sup>1</sup>ッシング(dressing)」といった対比に見るように、第1モーラへのAEVの適用は3モーラ語に多く見られる。

(C) に属する外来語の数は43語であるが、そのうち「プラ<sup>1</sup>ザ(plaza)」, 「トラ<sup>1</sup>フ(trough)」, 「クロ<sup>1</sup>ム(chrome)」の3語は例外的にアクセントが第2モーラに置かれる。また、「グ<sup>1</sup>リ<sup>1</sup>’ル(grill)」, 「ク<sup>1</sup>ロ<sup>1</sup>’ス(cross)」, 「グ<sup>1</sup>ロ<sup>1</sup>’ス(gross)」, 「トリ<sup>1</sup>’ル(trill)」, 「ブ<sup>1</sup>ラ<sup>1</sup>’シ(brush)」, 「プ<sup>1</sup>レ<sup>1</sup>’ス(press)」の6語については『大辞林』は2通りのアクセントを併記している。

#### 3.4. 3モーラの外来語のアクセントのまとめ

以上、3モーラの外来語のアクセントをいくつかの場合に分けて考察してきたが、その結果は次のように総括することができよう。

3モーラの外来語のアクセントは第1モーラに置かれるのを基本とする。ただし、第1モーラの母音が挿入母音であり、かつ、次の(i)～(iii)のいずれかの条件を満たすときには、アクセントは第2モーラに置かれる。

- (i) 第2・第3モーラが（原語の長母音または二重母音に対応する）長母音または母音連続を含む。
- (ii) 原語が（子音+）半母音で始まる。
- (iii) 原語が/s/+無声音で始まる。

#### 4. 4モーラの外来語のアクセント

長い外来語になると可能なアクセントの位置が増え、また、原語の音韻構造も複雑さを増すことから、外来語アクセントの分析もむずかしくなる。3モーラの外来語では原語の分節音に着目することでアクセントをかなり正確に予測することができたのに対し、4モーラ以上の外来語になると原語のアクセントも考慮に入れる必要が出てくる。また、音韻的な考慮だけではアクセントを決定することのできない場合も出てくるため、アクセントを3モーラ語の場合のような高い

精度で予測することは望めなくなる。

以下に、『大辞林』に記載された4モーラの外来語1,650語の分析結果を述べる。以後、便宜上、重音節の第1モーラを略して「重モーラ」と呼ぶことにする。重音節とは、(a) (原語の長母音または二重母音に対応する) 長母音または母音連続、(b) 撥音、(c) 促音のいずれかを含む2モーラ以上の音節を指すものとする。

#### 4.1. 4モーラ語(1) —— 第1モーラが重モーラである語

4モーラの外来語のうち、まず第1モーラか第2モーラが重モーラである語においては、その重モーラにアクセントが置かれる。

第1モーラが重モーラである語と第2モーラが重モーラである語とでは多少事情の異なるところがあるので、まずここで前者について述べ、後者については次の4.2.で述べることにする。

第1モーラが重モーラである語は『大辞林』に571語記載されている。そのうち543語が上述の一般化通りに第1モーラにアクセントを有している。

エンジン(engine), カーテン(curtain), サービス(service), シンボル(symbol), センター(center), パウダー(powder), ボイラー(boiler), マインド(mind), ミックス(mix), ライター(lighter, writer), ラウンジ(lounge), ロッカー(locker)

これらの語のアクセントは、伝統的に4モーラの外来語のアクセントの基本位置とされる第2モーラに置かれるはずのアクセントが、第2モーラが特殊拍であるために1モーラ前に置かれたものと解釈されるものである。と同時に、これらの語のアクセント位置は、「インビボ(in vivo)」「ルーチン(routine)」という543語中わずかに2語の例外を除き、原語のそれにも一致している。このように、これらの語におけるアクセント付与は、基本アクセントの観点からも原語アクセントとの一致の観点からも自然なものであることができる。

例外的に第3モーラにアクセントが置かれるものは571語中28語ある(28語中6語は原則通り第1モーラにアクセントを置く発音も併記されている)。うち20語は複合語としてのアクセントを与えられているものと見られる。「インドア(indoor)」「ヨーヨー(yo-yo)」「レイオフ(lay off)」などがその例で、複合語の後部要素(と見なされたもの)の第1モーラにアクセントが置かれている。ただし、「ノウハウ(know-how)」「ペンパル(pen pal)」「サンキュー(thank you)」のように複合語的でありながら複合語アクセントを与えられない語も存在し、「ムームー(muumuu)」対「ドードー(dodo)」のような対比も見られるので、複合語であるかどうかではなく、複合語として扱われているかどうかの問題であることになる。しかし、複合語扱いされているかどうかはアクセントの位置で判断するよりなく、結局のところ原語の発音や語構成に基づいてアクセントの位置を予測することは不可能と言わざるを得ない。

例外の残り8語のうち、「エンジョイ(enjoy)」「コンテナ(container)」「アイディア(idea)」の3語の(第3モーラに置かれる)アクセントは原語のアクセント位置に一致している。第1モーラにアクセントが置かれる543語では(例外となる2語を除いて)アクセント位置が原語と対応していたことを考えあわせると、これら3語のアクセントが例外的に第3モーラに置かれるのは原語

アクセントを反映したものと見てよいであろう。「コ'ンボ'イ(convoy)」「シャ'ンタ'ン(shantung)」の2語についても、原語で2通りの強勢配置があることから、第2音節に強勢を置く発音に基づくアクセントとして説明できる可能性がある。

残る例外は「ア'ンペ'ア(ampere)」「コ'ーヒ'ー(coffee)」「ラ'ンタ'ン(lantern)」の3語であるが、これらについては憶測ないし結果論の域を出る説明を与えることは困難である。

なお、「ウイ'ンド(wind)」「クイ'ック(quick)」「ナイ'ーブ(naive)」のような語は外来語の分節音に基づいて考えると、あたかも第1モーラ以下が「ウイン」「クイッ」「ナイー」という重音節で、それにもかかわらず上述の一般化に反してアクセントが第2モーラに置かれているかのようにも見える。しかし、これらの語に含まれる「ウイ」「クイ」「ナイ」という母音連続は原語の二重母音に対応するものではない。これらの語において問題となる重音節はそれぞれ「イン」「イッ」「イー」なのであり、一般化通りにその第1モーラ——すなわち、外来語の第2モーラ——にアクセントが置かれているのである(4.2.のケースに該当)。このように外来語のアクセントを考えるうえで原語の発音を考慮に入れる必要があることを端的に示す事例として注目に値するのが、「ホ'イスト(hoist)」対「ホイ'スト(whist)」という2語の対比である。両者は外来語の分節音レベルでは同一であるが、アクセントの置かれる位置が異なる。この違いは、原語の発音を考慮に入れて初めて正しく説明することができる。すなわち、前者の「ホイスト」では「ホイ」が原語の二重母音に対応する母音連続を含むことから第1モーラにアクセントが置かれるのに対し、後者の「ホイスト」では原語に二重母音が含まれず上述の一般化の適用対象にならない(4.3.で扱うケースに該当)のである。

#### 4.2. 4モーラ語(2)——第2モーラが重モーラである語

次に、第2モーラが重モーラである4モーラの外来語について述べる。これに該当する語は資料中に518語あり、このうち第2モーラにアクセントが置かれるものは403語である。アクセントを第1モーラに置く発音と第2モーラに置く発音とが併記された語が75語あり、これを含めると478語が上述の一般化に従うことになる。

まず、一般化通りに第2モーラにアクセントが置かれる語の例としては次のようなものがある。

アレ'ンジ(arrange), クレ'ーン(crane), ゴシ'ップ(gossip), スイ'ング(swing), スタ'ッフ(stuff), デザ'ート(dessert), ドライ'ブ(drive), トラ'ンク(trunk), ブラ'ウン(brown), ブロ'ック(block), リタ'イア(retire), レシ'ート(receipt)

4.1.で見たように、第1モーラが重モーラである4モーラの外来語については、第1モーラにアクセントが置かれる語は(例外となる2語を除き)原語のアクセント位置に一致している。それに対し、第2モーラが重モーラである外来語については、第2モーラにアクセントが置かれるものの中にも、原語アクセントとの不一致を見せるものも少なくない。『大辞林』において第2モーラにアクセントを置く発音だけが記された403語に限定しても、その数は60語近くに上る。次に示すのがそうした語の例である。

オ'レンジ(orange), ゴシ'ップ(gossip), パ'ターン(pattern), パ'ラ'ッド(ballad),

バリウム(barium), ビニール(vinyl), ヒロイン(heroine), ペダント(pedant),  
ミサイル(missile), ラケット(racket), ラジウム(radium)

アクセントを第1モーラに置く発音と第2モーラに置く発音が併記された語は上述の通り75語あるが、そのうち60語余りは外来語の第1モーラに対応する位置に原語の強勢がある。

ケチャップ(ketchup), コミック(comic), チケット(ticket), チャレンジ(challenge),  
ダメージ(damage), マジック(magic), ロボット(robot)

などがその例である。75語のうち「パレード(parade)」のように原語の第2音節以後に強勢がある語についてはすぐ後で触れる。

第2モーラが重モーラである4モーラの外来語518語のうち、一般化に従わずアクセントが第1モーラにのみ置かれる語は40語ある。これらのアクセントは例外なく原語のアクセントの位置に一致している。

カレッジ(college), カレント(current), コテージ(cottage), セカンド(second),  
メリット(merit), ユニット(unit), リビング(living), リミット(limit)

以上のことから考えて、大まかに言えば、4モーラの外来語は第2モーラにアクセントが置かれるのが基本で、原語のアクセントを保存するために第1モーラにアクセントが置かれる場合があると見ることができるのではないと思われる。

ただ、この解釈については2つの点が問題となり得る。その1つは、4モーラの外来語全体を通じて最も多いのは第2モーラにアクセントを置く語ではなく第1モーラにアクセントを置く語だという事実である。これについては、基本アクセントというものを必ずしも適用語数の多さに基づいて決めるのではなく、アクセントの位置を左右する他の要因が作用しないときに実現する無標のアクセントと捉えればよいものと思われる。

より実質的なもう1つの問題は、2通りのアクセントを持つ外来語の一部に

クリップ(clip), グリップ(grip), スイッチ(switch), スリッパ(slippers),  
コミット(commit), パレード(parade), ハロウィーン(Halloween)

のような語があるということで、これらの語では原語の強勢の位置に一致しないにもかかわらず第1モーラにもアクセントを置き得る形になっている。特に「クリップ」「グリップ」「スリッパ」などにおいてはAEVが適用していることを考えると、一部の4モーラ語では(第2モーラではなく)第1モーラにアクセントを置こうとする力が働くものと見ざるを得ない。ただし、3モーラ語の場合のように一定の条件を満たす語に一律にAEVが適用されるというわけではなく、個別的な現象と言うしかない<sup>9</sup>。このようにAEVが適用しアクセントが第1モーラに置かれる4モーラ語は4.3.2.で述べる種類の語にも見られる。

こうした観察から、4モーラの外来語の有するアンビヴァレントな性格が浮かび上がってくる。3モーラ語においてはアクセントの基本位置は第1モーラであると単純に言い切ることができるのに対し、4モーラ語では、第2モーラがアクセントの基本位置であると一応は言えるにしても、ときに第1モーラをアクセントの基本位置と見ざるを得ないような場合もあるわけである。4モーラの外来語の基本アクセントをきれいな形にまとめることがむずかしいのも無理のないことと言

えよう。ちなみに、5モーラ以上の語においては、AEVが適用して第1モーラにアクセントが置かれ得る語は、資料の限りでは「スリリング(thrilling)」1語しかない。

#### 4.3. 4モーラ語(3)——第1・第2モーラが重モーラでない語

第1モーラも第2モーラも重モーラでない4モーラの外来語は資料中に561語存在する。そのうち、アクセントが第1モーラに置かれる語は379語、第2モーラに置かれる語は191語、第3モーラに置かれる語は23語である(2通りのアクセントを持つ語があるため、これらの語数を合計すると全体の語数を超える)。これらの語は、第1モーラまたは第2モーラが重モーラである語に比べるとアクセントの分布が不透明な様相を呈するが、それでも原語の発音を考慮に入れることである程度の規則性を見出すことは可能である。

ここでは、当該の4モーラ語561語を、第1モーラと第2モーラの母音がそれぞれ本来母音であるか挿入母音であるかに基づいて4つの場合に分けて述べる。そのうちまず挿入母音を含む3つの場合を順次取り上げる。

4.3.1. 最初に、第1モーラの母音が本来母音で第2モーラの母音が挿入母音である語について述べる。これに該当する語は178語あるが、そのうち158語はもっぱら第1モーラにアクセントが置かれる。

エプロン(apron), キャプテン(captain), ジェスチュア(gesture), シグナル(signal), システム(system), ドクター(doctor), フィルター(filter), マキシム(maxim)

158語中原語のアクセントに一致しないのは「サクセス(success)」1語である(原語アクセントが2通りある「アドレス(address)」は一致・不一致を判断できない)。

これらの例から考えるかぎりでは、2モーラ目にアクセントを置こうとする力よりも、第2モーラへのAEVの適用を回避しようとする力のほうが強いと言える。

例外的に第2モーラにAEVが適用され得るのは、次のような語を含む8語だけである。

テキスト(text), パプリカ(paprika), フクシン(fuchsine), レプリカ(replica)

また、次のようにアクセントが第3モーラに置かれる語が全部で12語あるが、

オフショア(offshore), サプライ(supply), ネグрито(Negrito), プルタブ(pull-tab), ヘアダイ(hairdye), リプレー(replay)

その多くが複合語アクセントであるか英語の強勢の位置に対応しているかのいずれかであり、そうした説明が付かないのは「イグルー(igloo)」「オキシド(oxide)」「ディスカス(discus)」ぐらいである。

4.3.2. 次に、第1モーラの母音が挿入母音で第2モーラの母音が本来母音である語は79語ある。そのうち66語はもっぱら第2モーラにアクセントが置かれる。

グラマー(glamor, grammar), クリヤー(clear), スペシャル(special), トラブル(trouble), フラワー(flower), ブラザー(brother), プロパン(propane)

66語中7語は、次のように原語が(子音+)/w/で始まるものである。この種の語では例外なく第2モーラにアクセントが置かれる(補説参照)。

ウイ1ドー(widow), ウエ1スト(waist, west), ツイ1スト(twist), ホイ1スト(whist)

これらの66語においては4モーラ語の無標のアクセント位置である第2モーラにアクセントが置かれていることに加え, A E Vが適用しておらず, しかも, 「クレ1オ'メ(Cleome)」1語を除くとすべて原語のアクセントにも一致していることから, 自然で安定度の高いアクセント付与であると言える。

残りの13語のうち次のような11語においては, A E Vが適用してアクセントが第1モーラに置かれる。うち7語は, A E V適用形・不適用形の両様のアクセントが併記されている。

ス1リ'1ラー(thriller), ド1ラ'1ゴン(dragon), ド1ラ'1マー(drummer), ト1リ'1ガー(trigger),  
ト1ロ'1フィー(trophy), ト1ロ'1リー(trolley), ブ1ル'1マー(bloomers)

これらの語は, 4.2.で取り上げた「ク1リップ」「ス1リップ」「パ1レード」などと同様, 4モーラの外来語のアクセントの基本位置を考えるうえで問題となり得るものである。

残る2語である「プレビュ1ー(preview)」と「プロペ1ラ(propeller)」においてはアクセントが第3モーラに置かれるが, いずれも英語の強勢の位置に対応している。

4.3.3. 第1モーラの母音と第2モーラの母音がともに挿入母音である語は7語しかないが, うち6語は第2モーラにアクセントが置かれる。最後の「スプレー」については第3モーラにアクセントを置く発音も併記されている。

スク1イ'ズ(squeeze), スク1ラ'ム(scrum), スク1リュ'ー(screw), スト1レ'ス(stress),  
スト1ロ'ー(straw), スプ1レ'1ー(spray)

これらの語は原語アクセントとの一致を考えれば第3モーラにアクセントが置かれるところであるが, 第3モーラへのアクセント付与は忌避されるものと見られ, A E Vが適用した形になっている。アクセントを第1モーラか第2モーラに置くとするとどちらにしてもA E Vの適用を避けられないことから, 4モーラ語の基本アクセントに一致する後者の可能性が選択されているものと見られる。

例外は「スクエ1ア(square)」1語で, 原語のアクセントに一致している。ちなみに, 同じく3子音の連続で始まる語でも, 5モーラ以上の「スクリ1プト(script)」「ストラ1イキ(strike)」「スプレ1ッド(spread)」「ストロ'ベ1リー(strawberry)」のような語にA E Vが適用する例はない。

4.3.4. 挿入母音が関与しない第4のケースがまだ残っているが, 4.3.1.~4.3.3.で見てきた3つのケースにおけるアクセントの分布をここで表の形にまとめると表1のようになる。縦軸は3つのケースの区別, 横軸はアクセント位置の区別を示す。表左端の例えば「挿入・本来」という表記は, 第1モーラが挿入母音, 第2モーラが本来母音を含むということを表す。また, 語数の後に添えた「[AEV]」は, 当該のアクセントがA E V適用形であることを示す。「n(+m)」という表記については付表の説明を参照されたい。

表 1

	1	2	3	計
本来・挿入	158 (+2)	6 (+2) [AEV]	12	178
挿入・本来	4 (+7) [AEV]	66 (+7)	2	79
挿入・挿入	0	5 (+1) [AEV]	1 (+1)	7

「挿入・挿入」のケースを別とすれば、アクセントの付与がAEVの適用を回避する形で行われていることが明らかである。

ここで、AEVの適用を回避することは原語のアクセント位置を保存することに一致する場合も多いので、AEVの観点からの説明は原語アクセントの観点からの説明で置き換え得るのではないと思われるかも知れない。しかしながら、両者の説明は等価ではない。次の4.3.5.で見るAEVの適用の可能性がないケースにおいては原語アクセントに一致しない外来語の比率が高まることから考えて、表1に見るアクセントの分布の明確な偏りはAEVの適用回避と原語アクセントの保存という2つの要因の相乗効果として実現しているものと見られる。

AEVの適用回避と原語アクセントの保存という2つの要因の効果の違いは、モーラ数の多い外来語を用いればいっそう明瞭に説明することができる。例えば、「クリ<sup>1</sup>ケ<sup>1</sup>ット(cricket)」と「パ<sup>1</sup>ブリ<sup>1</sup>ック(public)」という2つの5モーラ語を例に取ると、『大辞林』によればそれぞれ「<sup>1</sup>」で示した2通りのアクセントが可能である。いずれもAEVの適用しないアクセントである。他方、AEVを適用した「\*クリ<sup>1</sup>ケ<sup>1</sup>ット」「\*パ<sup>1</sup>ブリ<sup>1</sup>ック」というアクセントはどちらもかなり不自然である。このことから分かるように、AEVの適用回避という要因は、自然な外来語アクセントの可能性を「クリ<sup>1</sup>ケ<sup>1</sup>ット」「パ<sup>1</sup>ブリ<sup>1</sup>ック」から「クリ<sup>1</sup>ケ<sup>1</sup>ット」「パ<sup>1</sup>ブリ<sup>1</sup>ック」へと一段階絞り込む効果を持つのであり、外来語アクセントを「クリ<sup>1</sup>ケ<sup>1</sup>ット」「パ<sup>1</sup>ブリ<sup>1</sup>ック」のように一意的に定めてしまう効果を持つ原語アクセントの保存という要因とは異なるものとして理解する必要がある。

4.3.5. さて、残る第4のケースは、第1モーラ、第2モーラともに本来母音を含むもので、該当する語は297語ある。4.3.1.で示した表にならってアクセントの分布を示すと表2のようになる。

表 2

	1	2	3	計
本来・本来	187 (+21)	83 (+21)	5 (+2)	297

これらの語においては（第1・第2モーラに）AEVが適用される可能性はない。したがって、アクセントの分布の説明はAEVの適用回避という要因以外のところに求めなければならないことになるが、これまで見てきたケースに比べると状況が不透明である。以下においてはアクセン

トを決める要因の1つと見られる原語アクセントの影響について考えてみたい。

第1モーラにアクセントが置かれる語と第2モーラにアクセントが置かれる語の数は(2通りのアクセントを持つ語を除くと)それぞれ187, 83であるが、これを原語アクセントとの一致関係に基づいて下位区分すれば表3のようになる。「その他」は、原語アクセントが2通りあるなどの理由により一致・不一致を判定できないものである。

表3

	1	2
原語アクセントに一致するもの	164	30
原語アクセントに一致しないもの	14	42
その他	9	11

具体例を挙げると、第1モーラにアクセントが置かれる語としては、

(原語アに一致するもの) アニマル(animal), ナチュラル(natural), ニュアンス(nuance),  
ペリオド(period), ポリシー(policy), メロディー(melody)

(原語アに一致しないもの) アプリarel(apparel), ベクレル(becquerel), ポラリス(Polaris),  
モノラル(monaural), レフリー(referee)

第2モーラにアクセントが置かれる語としては、

(原語アに一致するもの) アダルト(adult), イエロー(yellow), イレブン(eleven),  
セレクト(select), バジリカ(basilica), ポジション(position)

(原語アに一致しないもの) ウレタン(urethane), チェリスト(cellist), ファシズム(fascism),  
ハレルヤ(hallelujah), ミニチュア(miniature)

などがある。

表3に見るように、原語アクセントとの不一致を示すものの比率は、第2モーラにアクセントが置かれた語において高い。これは、原語アクセントを無視しても第2モーラにアクセントを置こうとする力が働いていることを示すものであろう。また、無標のアクセント位置でない第1モーラにアクセントが置かれた語の大半が原語アクセントとの一致を示すことから考えて、第1モーラのアクセントは原語アクセントを保存したものと見てよいであろう。

なお、第3モーラにアクセントが置かれ得る少数の語は「ソノブイ(sonobuoy)」「ミニカー(minicar)」などで、複合語としてのアクセントを与えられているものと見られる。

#### 4.4. 4モーラの外来語のアクセントのまとめ

4モーラの外来語のアクセントの分布を3モーラ語の場合のように明確な形にまとめることはできないが、以上の考察の結果を次のようにまとめておく。

4モーラの外来語のアクセントの基本位置は第2モーラである。ただし、一部には第1モーラを基本位置と見ざるを得ないような場合もある。また、第1モーラまたは第2モーラが重



モーラであれば、アクセントはそこに置かれることが多い。第1モーラも第2モーラも重モーラでない場合は、アクセントの基本位置を尊重しつつも、AEVの適用を回避する形で、また、原語アクセントの位置を保存する形でアクセントが付与されることが多い。

## 5. おわりに

外来語のアクセントに見られる規則性について、原語の分節音やアクセントの関与の可能性に着目して分析を行ってきた。長い外来語のアクセントの分析を始めとして残された課題は多いが、ここでの考察から外来語アクセントの研究の方法論に関して次の2点を指摘しておくことができるのではないと思う。

第1に、外来語アクセントに対する原語分節音の少なからぬ関与が明らかになった今、原語を「カタカナ語」化したレベルで——すなわち、原語の発音に対して母音挿入を始めとする分節的な処理を施して日本語化したレベルで——外来語のアクセントを分析しそこに規則性を見出そうとする方法では、多くの事実を闇のうちに取り残すことになると言わざるを得ない<sup>10</sup>。

第2に、従来諸家によって唱えられてきた外来語アクセントの法則は一般に語末からのモーラ数または音節数を数える方式を採用しているが、語末からの距離がアクセントを決める重要な要因であることは間違いないにしても、外来語アクセントの記述を全面的にそうした観点から行うのが最適かどうかは検討の余地があるように思われる。この小論では、外来語アクセントは諸要因の複合・競合によって決まるという前提に立って分析を行ってきた。

最後に、ここで論じてきたテーマの域外になるが、外来語アクセントに対する原語の関与はアクセントや分節音といった音韻的な側面にとどまらないことを確認しておきたい。まず、外来語を複合語と見てアクセントを付与するかどうかの問題となり得ることは周知の事実であり、ここでも触れる機会があった。接辞ないし造語要素の中には、外来語に一定したアクセントパターンをもたらすものがあるが——例えば、原語が-graph, -gramで終わる外来語のほとんどは、原語アクセントには関わりなく「〜グ1ラフ」「〜グ1ラム」というアクセントになる——、こうした要素はアクセント上複合語扱いを強制するものと解釈できるかも知れない。他方、屈折接辞や派生接辞の中には外来語のアクセントに影響を与えない、いわゆる韻律外的(extrametrical)なものもある。例えば、名詞化接辞-mentについて見ると、「マ'ネ1ージメント(management)」「コンパ1ーメントメント(compartment)」などから「メント」を除いてもアクセントは不変である。このあたりの事情は実際にはもっと複雑であるが、長い外来語のアクセントを考える際には語構成に関わるこうした諸要因が重要な意味を持つてくる。

付表 『大辞林』に記載された外来語アクセントの分布状況

外来語アクセントの全体的な分布を一覧できるように、外来語の種別ごとの語数とその内訳を本文での論述に沿った形でまとめておく。表中の「n (+m)」という表記は、当該のアクセントだけを有する語がn語、他のアクセントも併記された語がm語あることを表す。スペースの関係上、

外来語の種別は省略的に表現する。詳しくは本文を参照されたい。

(3 モーラ語)

	外来語の種別	一般化に従う 語の数	一般化に従わ ない語の数	計
3.1.	第1モーラが本来母音	1,135 (+9)	5 (+9)	1,149
3.2.	第2モーラ以下が長母音	25	0	25
	第2モーラ以下が母音連続	14 (+1)	2 (+1)	17
3.3.1.	(A) (子音+) 半母音	2	2	4
3.3.2.	(B) /s/+無声音	8	0	8
3.3.3.	(C) その他の子音連続	34 (+6)	3 (+6)	43
	総数			1,246

(4 モーラ語)

	外来語の種別	一般化に従う 語の数	一般化に従わ ない語の数	計
4.1.	第1モーラが重モーラ	543 (+6)	22 (+6)	571
4.2.	第2モーラが重モーラ	403 (+75)	40 (+75)	518
4.3.1.	本来・挿入			178
4.3.2.	挿入・本来			79
4.3.3.	挿入・挿入			7
4.3.5.	本来・本来			297
	総数			1,650

補説 原語中の半母音と外来語の分節音・アクセント

外来語の発音やアクセントを考えると、原語が半母音を含むものは格別の注意を要する。と言うのは、原語に含まれる半母音が外来語の分節音レベルでどのように実現されるかが場合によってさまざまに異なり（同一の原語が複数の外来語形を持つこともある）、そして、その相違がアクセントの位置を左右するからである。ここでは、原語中の半母音と外来語の分節音・アクセントとの関係についてまとめておく。

原語中の半母音が外来語化に際して受ける処遇は、筆者の分析によれば、次の3種5類に分類することができる。ここで、X-Y という表記は、原語のXという分節音（の連続）が外来語でYという分節音（の連続）になることを表す。C, Vはそれぞれ子音、母音を示す。また、「ウィ」という表記は/ui/という2モーラ、「ウィ」という表記は/wi/という1モーラを表し、他の表記に

についてもこれに準ずるものとする。

(A) モーラ化型 /w/ → /u/, /j/ → /i/

ウィット(wit), ウェア(wear), ウェー(way), ウォーター(water), イエス(yes)

(B) 非モーラ化型①

(B1) /(C)wV/ → /(Cu)wV/, /(C)jV/ → /(Ci)jV/

ワイド(wide), スクワット(squat), ダーウィン(Darwin), スウェーデン(Sweden),  
ウォンバット(wombat), ヤング(young), ビリヤード(billiards), ユーモア(humor),  
ヨット(yacht)

(B2) /(C)wV/ → /(Cu)V/, /(C)jV/ → /(Ci)V/

クイズ(quiz), スイート(suite, sweet), ウール(wool), クエスション(question),  
スウェーデン(Sweden), クォーツ(quartz), クオリティー(quality), エール(yell),  
オニオン(onion), ミリオン(million)

(C) 非モーラ化型②

(C1) /CwV/ → /CwV/, /CjV/ → /CjV/

エクイティー(equity), クォーク(quark), クォーテーションマーク(quotation mark),  
サンキュー(thank you), ニュース(news), デュエット(duet)

(C2) /CwV/ → /CV/

スカッシュ(squash), キルト(quilt), リキッド(liquid), シーケンス(sequence),  
スクォール(squall), コーテーションマーク(quotation mark)

(A)のモーラ化型は、半母音/w/, /j/が母音化し、独立のモーラ「ウ」「イ」を構成するものである。

非モーラ化型①のうち(B1)は、半母音がそれ自体で音節の頭子音として機能するものである。(B2)は、そこから半母音が脱落したと解釈できるものである。「ホワイト(white)」「ホイール(wheel)」のような語においては挿入母音が/u/でなく/o/となるが、それぞれ(B1), (B2)と同類である。

非モーラ化型②の(C1)では、半母音が他の子音に付随して合拗音ないし拗音を形成する。(C2)は、そこから半母音が脱落したものと解釈できるものである。「イコール(equal)」「コロキアル(colloquial)」「セーター(sweater)」「ツイーター(tweeter)」などの語はそれぞれが個別的な発音の変化を被っているが、いずれも(C2)に属するものと言える。

非モーラ化型2種4類の違いを原語の/kwo/という音連続を例に確認すれば、これを(B1)ないし(B2)として外来語化すればそれぞれ「クウォ(/kuwo/)」「クオ(/kuo/)」という2モーラになるのに対し、(C1)ないし(C2)として外来語化すれば「クオ(/kwo/)」「コ(/ko/)」という1モーラになる。

外来語のアクセントを考えるうえで重要な意味を持つのは、挿入母音を伴うケース、すなわち、(A)の場合と、(B)のうち原語の問題の音節が/CwV/で始まる場合とである。これらの場合、挿入母音を含むモーラには原則としてアクセントが置かれぬ。つまり、原語の/wi/が「ウイ」になったり/kwa/や/swi/が「クワ」「スイ」になったりしないということである。(A)の場合の挿入母

音は原語の半母音が母音化したもの、(B)の場合の挿入母音は子音連続を解消するために加えられたものという違いがあるが、アクセントの観点からは同等のものと見なしてよい。資料の範囲内で例外となるのは、筆者の見落としがなければ、「クヰイズ(quiz)」「スワン(swan)」「スイッチ(switch)」「スクイズ(squeeze)」の4語だけである。

なお、3種5類のあいだの区別は絶対的なものではない。上掲の語形はすべて『大辞林』が見出し語としているものであるが、Swedenやquotation markのように2通りの外来語形が記載されている場合もある。前者は(B1)と(B2)の両形、後者は(C1)と(C2)の両形が示されており、それぞれが半母音の脱落の有無による対比となっている。人名Wilsonについては非モーラ化型(B1)の「ウィルソン」という形が記載されているが、「ウイルソン」というモーラ化型(A)の発音もあり得よう。また、筆者の個人的感覚では、waterは「ウォーター」(モーラ化型(A))でも「ウォーター」(非モーラ化型(B1))でもなく、「ウウォーター」である。この場合、原語の/w/がモーラ化すると同時に第2モーラの子音としても機能している。

#### 注

- 1 例外的に外来語アクセントの原語アクセントへの依存を肯定している研究としては、川本(1964)や遠藤(1969)がある。
- 2 ここで従来の諸法則と言うのは、“外来語では語末から数えて3モーラ目(を含む音節の第1モーラ)にアクセントが置かれる”とする伝統的な説と、“語末から2音節目が重音節ならその音節(の第1モーラ)、それが軽音節ならその前の音節(の第1モーラ)にアクセントが置かれる”とする最近の説を指している。後者については、窪菌(1996)・金井(1997)を参照されたい。
- 3 外来語の平板型アクセントを観察して気付くのは、少なくとも表面的には、外来語のモーラ数によってその分布の様相がかなり異なっているということである。『大辞林』に記載された外来語の限りでは、平板型アクセントの比率は4モーラ語、5モーラ語、3モーラ語の順に高いが、まず4モーラ語については、秋永(1965)が指摘するように最後のモーラの母音の開口度との相関が認められる。『大辞林』のデータでは、最終モーラが/a/を含む語が平板型アクセントの比率が最も高く、以下、最終モーラが/o/を含む語、/e/を含む語と続く。5モーラ語では、平板型アクセントを持つ外来語の大半が「タイミンɡ(timing)」「ネーミンɡ(naming)」のように原語が-ingで終わる語か、「ヒスタミン(histamine)」「ホルマリン(formalin)」のように原語が-in(e)で終わる化学用語である。3モーラ語についてはそうした分布上の傾向を見出しがたい。
- 4 短縮語にまで範囲を広げると尾高型アクセントの語が出てくる。「スト(st[rike])」「ピケ(picke[t])」「マス(mas[turbation])」の3語は『大辞林』において第1モーラにアクセントを置く発音と第2モーラにアクセントを置く発音とが併記されている。
- 5 以下において掲げる語数は、『大辞林』に見出し語として立てられた項目の数である。例えば、「ゼリー(jelly)」と「ジェリー(jelly)」、「ステッキ(stick)」と「スティック(stick)」のように原語は1つでも2つの項目がある場合、それぞれを2語と数えている。「グラブ(glove)」と「グローブ(glove)」のように2つの項目のモーラ数が異なる場合もある。なお、一般性の低い語の中には『大辞林』のアクセント記述の妥当性を筆者には確認できないものもあるが、『大辞林』に記載されたアクセントに基づいて考察を進める。明らかに誤植と思われるようなアクセントの記載はこの小論で扱う外来語の範囲にはない。

- 6 『大辞林』の記述およびアクセント研究における一般的慣習に従って、促音節はその第1モーラにアクセントがあるとする理論上好都合な解釈を採るが、促音節を含む語のアクセントの位置は筆者の内省では判断できない。
- 7 窪菌(1996)は、「ツイン(twin)」を含む例を挙げて、第2・第3モーラが撥音節である外来語をここに挙げた種類の語と同様に扱っている。軽音節対重音節という二分法との関係で言えばそのようなにしたほうが記述がきれいになるが、3モーラ語のアクセントの事実に照らせば必ずしも最適な分析ではないように思われる。第1モーラが挿入母音を含み第3モーラが撥音である3モーラ語では「ク<sub>1</sub>ラ<sub>2</sub>ン(clan)」「ク<sub>1</sub>ロ<sub>2</sub>ン(clone)」「プ<sub>1</sub>ラ<sub>2</sub>ン(plan)」に見るように第1モーラにアクセントが置かれるのが原則で、「ツイン」は原語が半母音を含む外来語として別箇に扱ったほうがよいのではないかとと思われる。詳しくは3.3.1.および補説を参照されたい。
- 8 国立国語研究所(1990)に「『スパナ、スピン、シカゴ』は初めの拍の母音が無声化するのに伴い、アクセント核が後ろに動いたものとも考えられる」とある(110頁)。
- 9 4モーラ語(の第1モーラ)に対するAEVの適用は3モーラ語におけるAEVの適用と異なり散発的であることに加えて、次の2点の相違が観察される。第1に、AEVの適用を受ける4モーラ語には、「クリップ」「スリッパ」のように第3モーラが促音であるものが含まれる。もっとも、第3モーラが促音である3モーラの外来語は存在しないので、同様の適用例が3モーラ語にないのは当然のことである。第2に、3モーラ語の場合と異なり、第3モーラが撥音である4モーラ語にAEVが適用することはない。つまり、「プラン」や「スワン」にはAEVが適用するのに対して、例えば「プラント(plant)」にAEVが適用して「\*プラント」になるような例はない。これは促音節と撥音節ではアクセントを引き付ける力に差があることを示すものかも知れない。この推定の当否はともかく、事実としてAEV適用の可否とモーラ数は次のような関係にある(○は「適用」、×は「不適用」、△は「一部の語に限り適用」を表す)。

第3モーラの種類	3モーラ語	4モーラ語
長母音の後半	×	×
母音連続の後半	△*1	×
撥音	○*2	×
子音+母音	○*3	△*4
促音	該当語なし	△*5

\*1 基本的に不適用だが「グレア」「トロイ」「スパイ」で適用(3.2.)

\*2 「プラン」「クラン」「クロン」「スワン」(3.3.3.)

\*3 「プラス」「グラフ」「フリル」「スリム」など(3.3.3.)

\*4 散発的に「スリラー」「ドラゴン」「トロフィー」など(4.3.2.)

\*5 散発的に「クリップ」「スリッパ」「スリップ」など(4.2.)

- 10 先行研究の多くは、その旨を明言していなくても、事実上そのような方法で外来語アクセントを扱っている。中でも、金井(1997)では、カタカナ語化したものにアクセントを付与する規則を考案するという立場が積極的に表明されている。

#### 参考文献

秋永 一枝(1965)「川本崇雄氏『外来語アクセントの一特質』への疑問」『国語学』60,86-93

- 秋永 一枝 (1981) 『明解日本語アクセント辞典 (第2版)』 三省堂
- 遠藤 邦基 (1969) 「外来語アクセントの性格」『光華女子大光華女子短大研究紀要』 7, 68-84
- 小野 浩司 (1994) 「日本語にとっての外来語アクセント」『秋田大学教育学部研究紀要 人文科学・社会科学』 46, 9-20
- 金井 由允 (1997) 「外来語へのアクセント付与」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』 46, 337-348
- 川本 崇雄 (1964) 「外来語アクセントの一特質」『国語学』 59, 70-76
- 菅野 謙 (1970) 「外来語のアクセント (1)」『文研月報』 20-12, 5-16
- 菅野 謙 (1971a) 「外来語のアクセント (2)」『文研月報』 21-1, 15-25
- 菅野 謙 (1971b) 「外来語のアクセント (3)」『文研月報』 21-3, 47-55
- Haruo Kubozono (1996) Syllable and accent in Japanese: evidence from loanword accent  
『音声学会会報』 211, 71-82
- 国立国語研究所 (1990) 『外来語の形成とその教育』 大蔵省印刷局
- 中井 幸比古 (1988) 「京都方言における外来語のアクセントについて」『言語学研究』 7, 130-152,  
京都大学言語学研究会

(投稿受理日: 1999年1月4日)

(改稿受理日: 1999年3月8日)

---

田野村 忠温 (たのむら ただはる)

大阪外国語大学

562-8558 箕面市栗生間谷東8-1-8

〒562-8558 大阪府箕面市栗生間谷東8-1-8

## **On the relation of Japanese loanword accentuation to the pronunciation of the original word**

TANOMURA Tadaharu

Osaka University of Foreign Studies

### **Keywords**

loanword accent, consonant cluster, semivowel, epenthetic vowel, syllable weight

The accent of Japanese loanwords is generally assumed to be independent of the accent that is assigned to them in the original language. A detailed analysis of a large number of loanwords, however, reveals that loanword accentuation is conditioned not only by the accent, but also by the segmental structure of the original words. This paper discusses the ways in which the loanword accent is determined by the pronunciation of the original words. Specifically, it will be demonstrated that Japanese loanword accentuation depends upon the following factors: (a) whether and where the original word contains a consonant cluster or semivowel, which often triggers a vowel epenthesis in the loanword, (b) what kinds of consonants are involved, (c) whether and where the original word contains a sequence of segments realized as a heavy syllable in the loanword, and (d) where the original word is accented.